

令和4年12月2日

嬉野市議会
議長 辻 浩一 様

文教福祉常任委員会
委員長 諸井義人

文教福祉常任委員会報告書

令和4年第3回嬉野市議会定例会において付託された下記事件の調査結果を、嬉野市議会会議規則第107条の規定により報告する。

付託事件名

学校給食の現状と学校教育のICT化について

調査の理由

嬉野市においては、毎日児童・生徒のために安心安全な学校給食が提供されている。学校給食調理の作業手順や調理員等の労働環境について調査研究を行った。また、学校現場において子どもたちの給食の様子を観察した。

さらに、GIGAスクール構想で整備されたタブレット端末の活用状況の調査研究を行った。

調査の概要 学校給食及びICT教育について

調査日 令和4年10月18日（火）10時から15時まで

場所 嬉野市嬉野学校給食センター及び嬉野市立轟小学校

対応者	嬉野小学校	栄養教諭	河野	ひろ子	氏
	嬉野学校給食センター	所長	相川	奈津子	氏
	轟小学校	校長	白濱	正博	氏
	〃	教頭	熊本	由美子	氏
	教育総務課	課長	武藤	清子	氏
	学校教育課	課長	中野	宗利	氏

嬉野学校給食センターについて

轟小学校に隣接しており、築20年が経過している施設である。18名の調理員により嬉野町内の小中学校分1,385食がほとんど手作業で作られている。特に衛生面、安全面に気を付けて、時間内に調理が終わるように、各調理員の作業が効率的に行われている。食材においても地場産品の活用が図られている。

1. 給食センターの作業工程について

訪問当日のメニューは、ごはん、豚汁、ごま酢和え、ネギ入り卵焼き、牛乳であった。午前8時から11時30分の配送に至るまでフル稼働・共同作業で行われていた。

- ①ごはん：4名の担当で洗米・浸漬から仕込み・炊飯そして配缶。
- ②豚汁：3名の担当でこんにゃく茹で、出汁とり、芋・肉のカット、炒め、煮る、配缶。
- ③ごま酢和え：3名の担当で野菜のカット、茹で、冷却、和える、配缶。
学校給食では、安全面の観点から生野菜の提供はできない。
- ④ネギ入り卵焼き：5名の担当で約1,600個の卵割り、焼く、卵焼きカット、数える、配缶。

◎限られた時間内で効率的に給食を作り上げるために、栄養教諭により担当者全員分の作業工程表や作業動線図が毎日作成されている。これにより経験年数に差があったとしても、調理員全員が効率的に作業を行うことができている。

2. 委員会の意見

今回訪問した嬉野学校給食センターでは、児童・生徒へ安心安全で美味しい給食を提供するために、毎日頑張っておられる調理員の姿を拝見し、委員全員が感銘を受けた。そのような中、昨今の食材費や燃料費の高騰により保護者の負担増が危惧され、状況次第では財政支援も必要であると考えられる。

施設や設備の老朽化が進んでいるため、多額の修理費がかかるようになってきているが、調理員の労働環境の改善のためにも空調設備等の設置が必要である。

轟小学校での給食の様子について

1. 配膳・給食の様子

1年生から6年生までの給食時の様子を視察した。各学年、給食当番が手際よく配膳していた。食べる時は、美味しそうに食べていたが、コロナ禍のため、班を作って会話をしながらの食事ではなかった。早くコロナが収束し、以前のように会話をしながら食べられる楽しい時間となることを切に願う。

委員も校長室で美味しい給食を頂いた。

2. 食に関する指導

轟小学校においては、食に関する指導の全体計画が作成されており、食育の視点から目標達成のための指導が行われている。

児童の実態として、毎日朝ご飯を食べている児童の割合が 91.8%となっていることに驚いた。食に関心を持ち、食事の重要性を家庭へ働きかけた結果と考えられる。

食物アレルギーのある児童への対応も適切にされていた。保護者との面談の上、各アレルギーの把握もされており、嬉野市では、食べられない食材が給食に出る時は、弁当を持参するようにしている。

ICT 教育について

嬉野市では、文部科学省の GIGA スクール構想により ICT を基盤とした先端技術を活用して、「子どもの力を最大限に引き出す学び」を実現するために 1 人 1 台のタブレット端末や無線 LAN、電子黒板、書画カメラ、充電保管庫、ヘッドセット、貸出し用無線 LAN ルーター等が整備されている。

委員会としては、ICT 機器がどのように活用され、児童たちの学力向上に寄与しているかを調査するために全学年の授業の様子を視察した。

1. 嬉野市タブレット端末活用推進部会

情報化推進リーダーを中心に、市全体の情報交換及び端末を活用した授業の充実や教科での活用事例の共有を目的に活動されている。

授業支援ソフトや学習支援ソフトの活用及び操作研修を行っている。

2. 授業における ICT 機器の活用の様子

電子黒板とタブレット端末を活用した授業では、自分の考えを書いたノートをカメラ機能で撮影して、電子黒板に転送し、お互いの考えを発表する。

ドリル学習は、学習の振り返りとして活用されており、児童が自分のペースで進められるため、意欲的に取り組むことができている。

オンライン授業は、コロナ禍において学級閉鎖時や長期自宅待機児童への対応などで活用されている。

3. 委員会の意見

視察した轟小学校では、私たちが想像していた以上に ICT 機器が積極的に活用されていて、子どもたちも楽しくタブレット端末の操作を行っていた。校長をはじめとする教職員の研修の成果及び授業展開での子どもたち一人ひとりに対応した指導が行き届いていると感じた。

今後は、普通教室以外での活用も視野に入れての整備が必要である。また、オンラインでの英会話学習が始まるので、嬉野市からグローバルに活躍できる人材が出てくることを期待したい。